

環境政策・計画学科のこの一年

高橋 卓也

環境政策・計画学科長

今年度の喜ばしいニュースとしては、教員の受賞がある。村上一真准教授が、「2016 年度環境経営学会学会賞（学術貢献賞）」、および「2016 年度環境科学会論文賞」を受賞された。香川雄一教授は、独立行政法人日本学術振興会より「平成 28 年度科研費審査委員」として表彰された。これらの受賞は、本学科の研究水準の高さを示すとともに、各教員の地域、社会、研究者コミュニティへの貢献が評価されたものである。

10 月には白木裕斗助教が着任された。白木先生の研究分野はエネルギーシステム学、環境システム学であり、現在は、日本の電力システムのシミュレーション分析、国・地方自治体を対象にした気候変動緩和技術の導入可能性分析、家庭における省エネルギーの推進に向けた研究を行っておられる。今後、本学科、学部教育、研究、社会貢献に大きく寄与していただくこととなる。

7 月には、オープンキャンパスを実施した。学科の企画としては、昨年度同様、卒業研究の紹介が中心であった（詳しくは 2015 年度の年報の本項目を参照されたい）。多くの在学生に卒業研究の内容や学生生活について自分の言葉で紹介してもらい、来場の高校生・保護者からの好評を得た。

11 月 10 日、県立大学体育館にて学科球技大会が開催された。種目はバレーボール。異なる学年間の親睦を目的とし、研究室単位で 1 回生から 4 回生までの混成チームを結成した。本学科では、1 回生では人間探究学、2 回生では政策計画基礎演習Ⅰ・Ⅱで少人数指導を各教員が行っており、3 回生の研究室仮配属学生、4 回生の本配属学生とあわせて各教員の研究室単位チームが編成された。1 位賞品・近江牛のお肉、2 位賞品・パウムクーヘン、3 位賞品・駄菓子詰め合わせを巡って熱い戦いが繰り広げられた。

12 月には、学科スタッフとしてお世話になっていた森様が退職され、新たに増田様に勤務いただくこととなった。年々内容が充実している学科の教育

活動、広報宣伝活動を支える学科スタッフの役割は大きい。森様、お世話になりました。増田様、よろしく願いいたします。

本学科では、卒業研究に向けての問題意識の醸成を目指し、「学外現場演習」という実地調査の体験を 1 回生、2 回生に課している。自分の興味のある「現場」に赴き、実態、課題について調査し、報告するというもので、1 回生はイベント・会議等への参加、2 回生は対象者 2 人以上への聞き取り調査をする。（ご協力いただいた多方面の方々に感謝いたします。）1 月から 2 月にかけて、調査の報告会があった。その際のテーマを見てみる（高橋の主観的分類による）。1 回生については、廃棄物・循環型社会（11 件、以下カッコ内は件数）、まちづくり・観光（10）、地球温暖化（6）、環境一般・イベント（4）、国際環境問題（2）、防災（2）、グリーン購入（2）、自然保全・農林業（2）、エネルギー問題（1）だった（計 40 件）。2 回生については、まちづくり・過疎問題（13）、廃棄物・循環型社会（11）、農林業（4）、観光（3）、エネルギー問題（3）、公害・汚染（2）、フェアトレード（1）、生物多様性（1）、環境アセスメント（1）だった（計 39 件）。廃棄物、まちづくりが多く、学生の関心事であることがわかる。卒業研究のテーマについても傾向を見てみると、廃棄物・循環型社会（9）、グリーン購入・フェアトレード（4）、企業の環境取り組み（4）、環境教育（4）、交通（3）、防災・減災（3）、地球温暖化（2）、エネルギー（2）、農業（2）、NPO（2）、地域活性化（2）、ライフスタイル（1）、芸術活動（1）であった（計 39 件）。廃棄物関係への関心を継続させ、卒業研究のテーマとした学生が多い一方で、まちづくりについては、より具体的な政策、行動へと落とし込んだ研究としたことが推測できる。学生の時代感覚と教員の関心分野との相互作用によって、テーマの多様性が生まれている。

3 月には 39 名の学科学生が卒業した。開学以降 20 年以上を経て、卒業生は本学科の財産である。1 回生対象の政策形成施設演習では、企業、公務員、起業家、NPO、学術機関などさまざまな分野から先輩を迎え、1 回生のうちから自分の将来について身近なかたちで考えることができている。卒業研究へのご協力もいただいている。逆に、卒業生には、卒業後もこの学科を活用していただきたい。教員への相談、学生を巻き込んだ活動の展開、人材の確保などいろいろなことが想定できるだろう。

将来にわたって、本学科が創設当初の「持続可能な社会への転換」という志を持続しつつも、学生、卒業生、社会のニーズに応えるためには、どのようにあるべきか。今年度は、学部再編構想の一環として、教育組織と教員組織の分離（教教分離）および学科の体制・名称について議論を行った。意義のある改革となるよう、来年度からは具体化に向けて、粘り強い合意形成・意思決定が求められている。

環境建築デザイン学科のこの一年

芦澤 竜一

環境建築デザイン学科長

昨年度末に松岡拓公雄教授と高柳英明准教授が異動となり、11名の教員に加えて、今年度は2名の新たな教員が加わった。4月には金子尚志先生を准教授として迎えることができた。金子先生は、環境工学と設計をつなげる研究を行ってきており、自然エネルギーを利用したパッシブデザインの実践と研究の実績を多く持つ。環境建築デザイン学科の名に相応しい先生であり、環境エンジニアリングと建築デザインを統合する姿勢から学生達が多くを学べることを期待している。さらに10月には山崎泰寛先生を准教授として迎えることができた。山崎先生は、これまでの学科教員にはいない専門分野の持ち主で、建築雑誌や書籍の執筆・編集に長年携われ、建築理論と環境・社会との関係に強い関心を抱いており、現代社会の中での建築の役割について批評・考究してきている。社会において建築とは何かと問う姿勢は、この時代に建築の真の価値を学生が考えることを後押しし、私も含め学科教員も厳しく批評されるのではないかと内心どきどきしながら山崎先生の新たな息吹をととても楽しみにしている。金子先生と山崎先生には、教育、研究活動の益々のご活躍を期待するとともに、大学運営への貢献にも期待したい。

今年度の卒業研究は、23名が論文を、33名が設計を行った。例年に比べ、設計を選択する学生が多い年であった。最終の発表会はメインイベントとして大いに盛り上がった。全体的に論文はこつこつと時間をかけて積み上げた良作が多かった。一方で設計は、プロジェクトにかける情熱とパワーの物足り

なさを感じた。下級生がこの発表会から多くを学び、今年度の反省を踏まえ、来年度以降、この卒業研究イベントが更に発展した展開となることを大いに期待している。

また本学科は、例年学生の国際交流を積極的に取り組んでいるが、8月5～6日にタイのコンケン大学と合同ワークショップが信楽で開催された。本学科からは、学生13名、教員3枚が参加し、カンボジアにおける災害時を考慮した設計提案に取り組んだ。また11月11～14日には、フィリピンのサン・カルロス大学との合同ワークショップが本学にて開催された。本学からは、学生16名、教員3名が参加し、彦根の商店街の再生の設計提案に取り組んだ。学生が国際交流をしながら建築を共に考え、つくる姿勢も板についてきた気がする。

また今年度も地域と連携した学生主体の活動が多くみられた。白井宏昌准教授、永井拓生助教が、学生達と共に近江八幡でヨシのドームをつくり話題となった。川井操助教はVOID A PARTのプロジェクトで地域活動を続けている。陶器浩一先生は継続的に気仙沼の復興支援の活動などを続けている。

学科教員、学生が国内外の様々な地域で展開する活動は、年々活発となってきている。今後も滋賀から世界にまたがり各地域での活動が、教育・研究・地域貢献の場となりながら、益々発展していければと願う。

生物資源管理学科のこの一年

大久保 卓也

生物資源管理学科長

2016年度を振り返って、学科として重要な出来事を3つ挙げると、①教教分離の動きに伴う学部・学科組織の再検討、②推薦入試および前期・後期入学試験における競争倍率の低下、③学科カリキュラムの再検討、になる。

①の「教教分離」とは、教育組織と教員組織を分離して、学部・学科の枠を越えて社会ニーズの変化に応じた柔軟な教育カリキュラム編成ができるようにする、また、研究面でも柔軟に研究プロジェクトが組めるようにしようという考え方、構想である。2016年度は、井手学部長の指示のもと、各学科で